

アイディにおけるきくことの構造とその教育的意義

— 『聴くことと声』に定位して—

A Structure of Listening by Ihde and the Pedagogical Significance

— Based on “Listening and Voice” —

神林 哲平

Tepei KAMBAYASHI

目 次

はじめに

1. アイディの研究歴と『聴くことと声』の位置づけ
2. 『聴くことと声』における諸概念
3. きくことの構造から見る教育的意義

おわりに

はじめに

神林（2019）では、「きくこと」をテーマに含む現象学文献（デリダ（Derrida, 2005/1967）『声と現象』、アイディ（Ihde, 初版1976、第2版2007、以下2007と表記する）『聴くことと声』、デュフレンヌ（Dufrenne, 1995/1991）『眼と耳』、鷺田（1999）『聴くことの力』、森（2011）『〈実践=教育思想〉の構築』）について、比較的アプローチによって検討した。「研究動機や意図、目的、問題提起」、「アプローチ（言及している現象学者）」、「きく対象の射程」といった観点から比較検討を行った結果、アイディの『聴くことと声』が包括性という点で本研究の志向にもっとも妥当であることが考察された。

一方、上記の比較によってアイディ（2007）の知見の一端は素描されたが、その全体像や具体的な記述、そしてそこから導き出されるアイディにおけるきくことの構造については十分に掘り下げられていたとは言えない。そこで本研究では、『聴くことと声』における具体的な記述から、アイディ（2007）におけるきくことの構造を描き出し、教育学における理論や実践の考察の礎石とすることを目的とする。アイディは自国のアメリカでは20冊以上の著作を出版していることに加え、『聴くことと声』についても他領域にわたって引用されていることから、一定の評価を獲得していると思われる。一方で、国内では『現象学事典』（事典では「イーデ」と表記されている）にその名を連ねているものの著作の邦

訳はなく、ことに教育研究ではまだほとんど援用されていないことから分かるように、知名度が高いわけではない。そのようなアイディの思想体系の一端となるきくことの構造を示すという点においても、考察する意義が見いだせるだろう。

本章では、以下の手順で検討を進める。まず、アイディの生い立ちや経歴、諸著作を概観し、そうした研究歴全体のなかで『聴くことと声』がどこに位置づけられるのか整理する（第1節）。次に、『聴くことと声』におけるアイディのきくことの構造について、具体的な記述から考察する（第2節）。最後に、ここまでの検討を礎石として、その構造に見られる諸概念や知見は、教育学領域にどのように関連づけられ、どのような教育的意義が見いだされるのか、平易に述べれば、アイディのきくことは、我々の日常や教育にどのような新しい提案をしてくれるのか、その見通しを示す（第3節）。

1. アイディの研究歴と『聴くことと声』の位置づけ

アイディの生い立ちや研究歴、著作については、セリンジャー（Selinger, 2006）が編集した『ポスト現象学：アイディへの批評的な手引き（*Postphenomenology: A Critical Companion to Ihde*）』の序論（Introduction）に詳しい。ここでの記述を中心として、アイディの生い立ちや経歴、諸著作を概観し、そうした研究歴全体のなかで『聴

くことと声』がどこに位置づけられるのかを整理したい。

1.1 生い立ちや経歴

ドン・アイディ (Don Ihde) は、1934年1月14日にカンザス州のホープで生を受けた。カンザス州は合衆国の中西部に位置し、州全体が平坦な土地であることから大規模農業に適しており、農業や牧畜業が盛んである。ホープは、州の中央部東に位置するディキンソン郡を構成する都市の1つで、10年ごとに行われる国勢調査によると、人口は、アイディが生まれる前後の1930年は556人、1940年は500人、そして2010年では368人と推移しており、現在では過疎化の進んだ農村地域となっている。アイディもまた農家の生まれで、ドイツ系の名前から分かるように、ドイツ系アメリカ人の地域社会で育った。セリンジャーによると、「アイディの教育は、馬に乗って通学し、教室が1つだけの古びた校舎で始まり、トラクターが走り、小麦が脱穀される風景が予想されるような田舎の日常に囲まれて人格形成期は過ぎていった」(Selinger, 2006, p.1) という。『聴くことと声』で扱われる事象には、オリーブツグミやフクロウの声といった牧歌的なものが見られるが、それにはこうした生い立ちが影響していると考えられよう。

大学進学の際に地元を離れ、カンザス大学ではスピーチ・アンド・ドラマを専攻。1956年に卒業する。大学における哲学の授業でのテーマとは異なり、「アイディの純粋な哲学への関心は実存的なもので、主にカミュ、サルトル、キルケゴール、ティリッヒ(ドイツのプロテスタント神学者)の諸著作にあった」(Ibid.) ようである。『聴くことと声』においては、現象学-実存主義の系譜にあるハイデガーに依拠したアプローチがなされるが、当時のこうした実存的な関心が継続していたことがうかがえる。

その後、アンドーヴァー・ニュートン神学校で1959年に神学修士を取得する。前述のティリッヒのもとで神学を学び、修士論文ではロシアの哲学者であるニコライ・ベルジャーエフの哲学をテーマとした。

博士課程では、ボストン大学に進む。セリンジャーによれば、「大学院での研究が発展するにつれて、アイディの神学的な関心は、哲学的な関心に超越されるようになる。フッサール、ハイデガー、

メルロ＝ポンティを中心とした現象学へと焦点がうつっていった」(Ibid., p.2) とされる。アメリカの哲学者、ジョン・ラベリーとチェコの哲学者、エラジム・コハークの指導の下、アイディは英語圏では初めてとなるポール・リクールについての博士論文『現象学的方法論とポール・リクルールの哲学的人間学』を執筆。1964年に博士号を取得した。その後もフルブライト研究員としてパリに滞在中(1967-68年)、リクルールの諸業績を対象とした英語圏では初となる体系的な研究を行ったり、さらにはリクルールの主要業績の1つである『解釈の対立 (*The Conflict of Interpretations*)』の英訳の編集と序文を手掛けたりした。このように、研究者としての出発点においては、「現象学に関心を持ち、リクールを英語圏に知らしめた研究者」と位置づけられるだろう。一方で、セリンジャーによれば、「リクール研究においては権威のある力をもっているにもかかわらず、アイディ自身はリクール研究者と決めつけられることを避けてきた」(Ibid., p.3) という。それは、以降に記述する諸著作に見られるような多岐にわたる哲学的関心のためだと考えられる。

アイディの最初のテニユア・トラックは南イリノイ大学で、1969年まで在籍した。この頃になると現象学に加え、「道具主義¹⁾ や他の科学技術論にも関心を描き始めた」(Ibid., p.2) とされる。そして、2番目にして最終的なポストであるニューヨーク州立大学ストーニーブルック校へ移る。そこでの教育課程の方向性を整えるために尽力した。また、学内にテクノサイエンス研究グループを創設し、開講したセミナーには、「多様な学問領域から国際的な研究者が訪れた」(Ibid.) という。2012年の退官後も精力的に研究活動を継続し、2013年には生物哲学で優れた貢献をした研究者に対して授与される、国際生物哲学フォーラム (the International Forum for Biophilosophy) によるゴールデン・エウリュディス賞 (The Golden Eurydice Award) を受賞している。

1.2 諸著作からみる『聴くことと声』の位置づけ

ニューヨーク州立大学で教鞭をとる傍ら、アイディは、多くの研究書を執筆した。前述したように、2020年現在に至るまでに20冊以上の著作を世に送り出している。以下に、諸著作の中から単著を列挙

する。

- ①『解釈的現象学：ポール・リクール哲学 (Hermeneutic Phenomenology: The Philosophy of Paul Ricoeur)』(1971)
- ②『意味と意義 (Sense and Significance)』(1973)
- ③『聴くことと声：音の現象学 (Listening and Voice: A phenomenology of sound)』(1976)
*2007年には、副題が『音の諸現象学 (Phenomenologies of sound)』に改題された第2版が出版されている。
- ④『実験的現象学：序論 (Experimental Phenomenology: An Introduction)』(1977)
*2012年には、副題が『多元安定性 (Multistabilities)』に改題された第2版が出版されている。
- ⑤『技術と実践：科学技術の哲学 (Technics and Praxis: A Philosophy of Technology)』(1979)
- ⑥『実存的技術論 (Existential Technics)』(1983)
- ⑦『現象学の重要性 (Consequences of Phenomenology)』(1986)
- ⑧『科学技術と生活世界：庭園から大地へ (Technology and the Lifeworld: From Garden to Earth)』(1990)
- ⑨『道具的实在論：科学技術哲学と科学哲学の接点 (Instrumental Realism: The Interface between Philosophy of Technology and Philosophy of Science)』(1991)
- ⑩『科学技術の哲学：序論 (Philosophy of Technology: An Introduction)』(1993a)
- ⑪『ポスト現象学：ポストモダンの文脈における試論 (Postphenomenology: Essays in the Postmodern Context)』(1993b)
- ⑫『解釈学の拡張：科学における視覚主義 (Expanding Hermeneutics: Visualism in Science)』(1998)
- ⑬『科学技術における身体 (Bodies in Technology)』(2002)
- ⑭『反語的技術論 (Ironic Technics)』(2008)
- ⑮『ポスト現象学とテクノサイエンス (Postphenomenology and Technoscience)』(2009)
- ⑯『身体化された技術論 (Embodied Technics)』

(2010a)

- ⑰『ハイデガーの技術論：ポスト現象学的な視座から (Heidegger's Technologies: Postphenomenological Perspectives)』(2010b)
- ⑱『音響的技術論 (Acoustic Technics)』(2016a)
- ⑲『フッサールのあるべき所のない技術論 (Husserl's Missing Technologies)』(2016b)
- ⑳『医療的技術論 (Medical Technics)』(2019)

タイトルを概観すると、「現象学」、「科学技術もしくはテクノサイエンス」、「ポスト現象学」という3つの関心領域が見てとれる。これらの関心領域が交錯するところに、「リクール研究者」にとどまらないアイディの独自性が認められるだろう。こうした関心領域から形成されるアイディの思想は、どのような体系をなしているのだろうか。

アイディ自身は、知人とのやりとりのエピソードを皮切りに、著作①～④までを現象学的なアプローチによる「初期アイディ (early Ihde)」、著作⑤～⑧までを科学技術の哲学の「中期アイディ (middle Ihde)」、(2006年時点であるため) 著作⑨～⑭までをテクノサイエンスやポスト現象学を提唱した「現アイディ (recent Ihde)」と、時系列によって関心領域の推移を語っている (Ihde, 2006, pp.268-269)。その後の著作を見ても、方向性は「現アイディ」と大きく異ならないため、本稿では著作⑨以降のアイディを「後期アイディ」と措定する。この区分からすると、『聴くことと声』は現象学的なアプローチによる「初期アイディ」に位置づけられる。したがって、本稿では「初期アイディ」における思想の一端となるきくことの構造について考察することとなる。

一方、『聴くことと声』が初期アイディに位置づけられるとしても、例えば現象学に学際性や非基礎づけ主義²⁾的な実践性を見いだすなど、後期アイディにおけるポスト現象学の萌芽となるような記述は残している。また、視覚経験について「現象学する」という点で『聴くことと声』の姉妹編とも言える初期アイディの著作である『実験的現象学』では、その第2版の序文に「実践において現象学することによって、私はその古典的な表現とは異なる結果を見いだした」(Ihde, 2012, p.xiv) という記述がある。こうしたことから、ここでの「現象学する」スタイ

ルが非基礎づけ主義的であるという点において、古典的な現象学とは異なる歩みを始めたと解釈できる。それが、後のポスト現象学に大きな影響を与えているのである。

次節では、『聴くことと声』における具体的な記述をたどりながら、知覚経験及び言語の双方の文脈を結びうる学際性や実践性、そのアプローチの特徴を皮切りとして、アイディにおけるきくことの構造を検討する。

2. 『聴くことと声』における諸概念

神林 (2019) では、きくことを主題とする現象学文献について目的と方法、対象を概観しながら比較検討し、アイディの『聴くことと声』が学際的、包括的という意味において本研究の方法として妥当であるということを述べた。ここでは、その内実をより掘り下げるために、具体的な記述を手がかりにして全体像を捉え、アイディにおけるきくことの構造化を図りたい。同時に、『聴くことと声』が理論面だけでなく、いかに「事象そのものへ」向かうことのできる実践性を有する論考であるかということについて、この文献を引用している先行研究を位置づけることで論証していく。

2.1 『聴くことと声』の研究目的とその背景～視覚主義の超克

はじめに、『聴くことと声』の第1章における研究目的に触れておきたい。それは、「視覚と経験について自明視されているあらゆる信念にともなう現状から脱却し、全く異なる経験理解へと、聴覚経験の現象学に根ざした経験理解へと移行すること」(Ihde, 2007, p.15) である。つまり、我々の日常にとって「当たり前」と思っていることや、日頃考えないようなことについて改めて問い直し、今までとは異なる物事の捉え方・考え方ができるようになる、ということであり、そのテーマの中心がきくことに置かれている、と換言することが可能だろう。

こうした目的の背景として挙げられているのが、「視覚主義 (visualism)」である。アイディによれば、哲学史、思想史において長らく優遇されていたのは視覚主義であり、その根源には古代ギリシア哲学思想に由来する潜在的な視覚への還元³⁾と、視

覚そのものの還元⁴⁾という二重の要素があるという (Ibid., pp.3-15)。例えば、哲学の一潮流をなす現象学においても例外ではなく、「直観」、「射映」といった視覚的な術語が用いられている。なぜ視覚主義が優遇されてきたのか。それは、哲学が分^レかる^レことを目指す営為であるためだと考える。分^レかる^レことは、分^レける^レことであり、自に見^レえる^レようにすることなのである。明^レらかに^レする、明^レる^レみに^レ出す、解^レ明^レするといった言葉は、その裏づけとなろう。

哲学から派生した諸学問の研究領域においても、視覚主義が優遇されてきた。アイディの「視覚主義」を引用した諸論考からも、そうした傾向が見て取れる。例えば映画学領域では、ソブチャック (Sobchack, 2005) が映画におけるドルビー・デジタル・サウンドのトレーラー (予告編) を対象とした視聴覚経験について考察している。その冒頭で、アイディを引き合いに出しながら、映画に関する経験において以前は支配的であった視覚から、音響技術や感覚器官へ強調点の遷移があったことと、科学技術による聴くことの拡張を結びつけている。文学領域ではカミンズ (Cummins, 2013) が、オーストラリアの小説家であるアレックス・ミラー (Alex Miller) の2作品におけるサウンドスケープ⁵⁾的な記述から、セントラル・クイーンズランドの音と沈黙について考察した。カミンズは冒頭で、音や聴くことの探求がこれまで部分的に視覚的なパラダイムに依拠していたことを指摘し、そこでジェイ (Jay, 1993) の「視覚中心主義 (ocularcentrism)」と類似の位置づけとしてアイディの視覚主義に触れている。『聴くことと声』の第1版は1976年であるため、ジェイの視覚中心主義の先駆けであると言えよう。教育学領域ではガーシオン (Gershon, 2011) が、教育システムとしての音を概念化するために、すべての音が聞き手/聴き手にとって意味をもつことに着目する。そして、今までの音に関する方法論や理論には西洋の視覚主義が内包されていることや、それに偏ることは他の知覚も含めた意味生成には及ばないことを示す根拠の1つとして、アイディを引用した。可視化、定量化、細分化、効果の測定といった手法は、もとをたどればすべて視覚主義に行き着く。そして、こうした視覚主義は、学際性よりも多専門性⁶⁾との方が相性がよいだろう。要素還元的な志向が、多専門性と合致するためである。

アイディが目論むのは、この視覚主義の超克である。なぜならば、現代哲学はもはや視覚主義だけでは解決することが困難な問題が生じているためである。アイディは次のように述べる。

例えば、象徴的なことだが、多くの現代哲学にほとんど克服不可能な一連の問題を投げかけているのは、見えないものである。「内的な」不可視性のために自らを露出しない「他者の心」や人格、いまだ隠れた「神々」、単純な視覚的現出をたえず逃れている私自身の「自己」。語られもし、聞かれもする言語の全領域は、私たちの見ることがまた聞くことでもあるのではない限り、解決不可能にとどまらざるをえない。聴くことが注意を払うのは、見えないものである。(Ihde, 2007, p.14)

こうした関心は、哲学領域では例えばクーツ(Coutts, 2017)の論考に継承されている。クーツは後期メルロ＝ポンティの存在論におけるメタファーや比喩的な語法について検討し、アイディの知見により「身体の沈黙した内側の深みの中から外へと反響する響き渡る発話としての声の到来と、沈黙して不可視な世界の奥深さの現れとの間に明確な結びつきを確立することが可能である」(Coutts, 2017, p.19)と述べた。視覚主義から聴覚的次元への転回を打ち出したアイディの知見と、感じられる存在が単に見えるもののみから示されているわけではないというメルロ＝ポンティの知見とを結びつけ、単一の感覚は一面的な世界の見方しか導かないと論じている。他領域では、前述の映画学におけるソブチャック(2005)が、ドルビー・デジタル・サウンドのトレーラーは、視覚イメージが音を支配したり土台となったりしているというよりはむしろ、音がイメージを創造したり支配したり象ったりしていることを示し、そこでアイディの「聴覚次元への転回」(Ihde, 2007, p.14)を引き合いに出している。さらにソブチャック(2012)においてもこの関心は引き継がれ、そこではスクリーンに投影された青の色彩に朗読と音楽が添えられた作品であるデレク・ジャーマンの映画『ブルー』を学生に上映した実践について、質的な記述による現象学的考察がなされている。視覚には距離があることと聴覚は全方向的

であることといった概念が対比的に考察されるなかで、前述した「聴くことが注意を払うのは、見えないものである」(Ihde, 2007, p.14)という記述を取り上げる。そして、この特殊な映画経験については、普通ではない視覚対象に見ることが引き込まれると同時に、聴くことが不可視なものに注意を向けるという要求がなされるとし、この映画を経験した者によって、否定的であれ肯定的であれ、価値づけられる身体的な気づきの極端な状況が引き起こされるとソブチャックは語っている(Sobchack, 2012, p.30)。

以上のような視覚主義が優遇されている現状を乗り越えるために、アイディは聴覚的転回を目指し、既述したような研究目的を提示した。留意すべきところは、「視覚そのものを聴覚そのものに置き換えることではない」(Ihde, 2007, p.15)ということであろう。置き換えるだけであれば、聴覚主義ともいべき状況に陥ってしまう。そうではなく、聴覚をモチーフとしながらも、今までとは異なる経験理解へと移行するというところに主眼が置かれていると言えよう。

2.2 『聴くことと声』におけるアプローチの特徴

上記の背景に基づく研究目的に照らし合わせて、アイディはどのようなアプローチで迫ったのだろうか。端的に言えば、「近似(approximation)」という手立てを用いて、「第1現象学(first phenomenology)」と「第2現象学(second phenomenology)」を中心とした諸概念を往還しながら探求するという、アイディ独自のアプローチにその特徴が見られると考える。

2.2.1 第1現象学と第2現象学

アイディは、『聴くことと声』の第2章と第3章において、第1現象学と第2現象学によるアプローチについて詳説している。まず第2章の冒頭で、アイディは「[本書では、]音の探求を現象学とともに始める。この思考スタイルこそ、多面的で複雑かつ本質的なかたちで、経験を厳密に検討することに専念させてくれる」(Ihde, 2007, p.17)と、現象学を用いる意義を端的に示す。こうした現象学による思考スタイルは、「事象そのものへ」向かう諸論考でも踏襲されている。例えば現代音楽領域において、アンドルーズ(Andrews, 2013)は「音の探求を現

象学とともに始める」(Ihde, 2007, p.17) に則り、ミュージック・コンクレート⁷⁾を提唱したフランスの音楽家であるピエール・シェフェールの実践について現象学的還元によって探究した。そして、前述したアイディの視覚主義の記述に触れながら、音事象の物理的な原因を伴うあらゆる関心ごとを保留する「還元的聴取 (reduced listening)」(Andrews, 2013, p.71) といった概念を生成している。

次にアイディは、経験が我々にとってなじみ深いという点で現象学ほど簡単なものではなく、一方でなじみ深いゆえに経験そのものを暗示的なものにしてしまうという点で現象学ほど難しいものはないと、その特質を述べたうえで、このような現象学がフッサールとハイデガーの哲学によって導かれたという歴史的な背景に触れる (Ihde, 2007, p.17)。そして、「この2人は相互に異なる問題から出発したが、私は自身の研究目的のために、現象学研究におけるこの2人の創設者を、同じ思考様式に属するものとみなすつもりである」(Ibid.) と論じ、フッサールを第1現象学、ハイデガーを第2現象学の導き手として位置づけるのである。

ここからは、前述の『聴くことと声』における研究目的に応じて、妥当な手段を独自に設定したことがうかがえよう。それらが同じ思考様式に属するものとみなすことのできる根拠の1つは、「第1現象学と第2現象学を統一する道の手がかりは、経験や事物の中心と地平との間に生じる隔たりにある」(Ibid., p.18) というアイディの記述に見られる。ここで記されている「中心」について、アイディは「核」、「焦点」など多様な名称を用いており、「地平」についても「背景」、「周縁」と関連づけているところが度々見られる。この「地平」は、フッサールにおける現象学の展開のなかで大きく発展させられた概念である。フッサールの思想は初期、中期、後期に分けて捉えることができるが、アイディが第3章において経験の「核-地平構造」(Ibid., p.39) として図式化した(図1)のは、視覚経験を対象としていることから、中期フッサール (1979/1913) の『イデー』に依拠していると思われる。そこでは、視覚の中心にある紙とその周囲にある本、鉛筆、インク壺などの経験を事例にしなが、ある経験の背景について語っており、ここでは顕在的な諸体験が、非顕在的な諸体験の「庭」、すなわち地平

によって取り囲まれているとしている(フッサール, 1979/1913, pp.154-159)。「未規定な現実という曖昧に意識された地平」(同書, p.127) に取り囲まれているとも記述している。それを踏まえて図1を読み解くと、(i) は、「志向性の中心的な『対象』ない

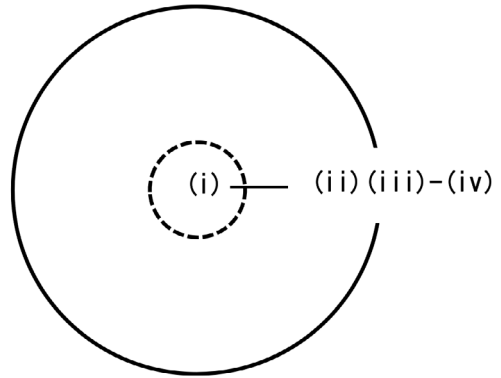


図1. 核-地平構造
(Ihde, 2007, p.39より作成)

しある幅をもった対象」(Ihde, 2007, p.38) で、前述のフッサールの事例であれば「紙」が該当する。それを取り囲みつつ状況づけるのが (ii) の周縁となっている。「本、鉛筆、インク壺」が当てはまるだろう。(iii) が開けの限界という意味での地平であり、視覚で言えば、視野の限界の部分を目指す。(iv) が不在もしくは空虚の地平である。視覚経験では、自分の背後などの見えない領域のことを示している。第1現象学では、志向性によって中心が明らかされ、第2現象学では「ひとたび中心が発見されると、道は限界と地平へ向けて『外側』にも開かれる」(Ibid., p.18) とアイディは述べる。ここでの外側というのは、ハイデガーにおける「脱自⁸⁾」を指していると思われる。ハイデガー (2020/1927) は、自己を越えて(脱自的に)他のものを配慮するという仕方は根本的に時間的であるとして、将来性、既往性、現在へと向けられる脱自的な3つの地平が統一されているとする (pp.220-222)。空間的に地平を捉えたフッサールと時間的に地平を捉えたハイデガーというように、両者の地平に対する捉え方は異なるが、アイディは双方の現象学に共通する道を見いだすのである。

2.2.2 第1現象学の特質

それでは具体的に、それぞれのアプローチについての記述から、その特質を考察していく。アイディは第1現象学について、次のように述べる。

フッサールによって創始された第1現象学は、……自己-意識的に展開された方法として、高度に技巧化された言語と一連の知的手続きによって統制されている。エポケー、諸々の現象学的還元、括弧入れなど、フッサールが生み出した多様な専門用語は、ここでは、経験の特定の層へと徐々に接近するための手段と見なされるべきである。それは始まりであり、自明とされている信念を脱構築し、新たな言語と展望を再構築することを通して、経験の科学の原型となる。(Ihde, 2007, p.18)

ここで述べられている「多様な専門用語」もまた、中期フッサール(1979/1913)における『イデーン』からのものが中心であると思われる。「現象学的還元」とは、一般定立がなされる自然的態度の徹底的な変更のことであり、その具体的な操作として自然的態度を一時的に停止するのが「エポケー」と呼ばれ、「括弧入れ」も基本的には同じ意味合いで用いられる(フッサール, 1979/1913, pp.132-143)。こうした手続きによって、例えば世界は実在するといった自然的態度、アイディに言わせれば「自明とされている信念」が脱構築されるのである。フッサールのとりわけ初期から中期にかけては、諸学問を基礎づける「厳密な学」として現象学を位置づけていることもあり(フッサール, 1997/1958)、形式的な手段に注目が集まることある。ただし、アイディはその目的を的確に捉え、フッサールによる一連の知的手続きはあくまで経験の解明のためであり、「それまでよりいっそう奥深い仕方で経験に帰属するようにさせてくれる」(Ihde, 2007, p.18)ことを目指しているのである。このように、第1現象学においては「経験」がキーワードの1つとなると言えるだろう。そして、その経験が豊かであり、かつ複雑であるということ解明していくために、「本質」、「構造」、「現在(現前)」といったキーワードが第1現象学には見られることをアイディは指摘している(Ibid., p.20)。こうした経験の解明にあ

たって、フッサールは視覚経験が中心であるが、アイディは後述する「近似」を通して聴覚経験における上述の概念について探求しようとする。このように、第1現象学では、アイディは知覚経験におけるきくことの文脈から探求をしていることが分かるだろう。

このような第1現象学というアイディのフッサール現象学に対する解釈は、例えば文学領域における研究に援用されている。ティトン(Titon, 2015)は、『ウォールデン：森の生活』が代表作であるアメリカの作家、ヘンリー・デイヴィッド・ソローの叙述から、ソローの音世界について探究した。ソローと環境や世界との関わりについての考察を通して、ソローの根底にある認識論は関係的で現象学的であるとティトンは論じる。そして、ソローの牧歌的なシンフォニーは環境と人間を含んだ音楽であるとティトンは示し、そうした関わりキーワードが現前と共現前にあると考える。そこで、アイディの記述から現象学の目的が即時性や経験的な現前の構造を探究することであることを示し、その後の考察につなげていくのである。ここでティトンが述べている現象学は、「経験的な現前の構造」というところから第1現象学であると判断できる。

2.2.3 第2現象学の特質

第2現象学についてはどうだろうか。アイディは、次のように第2現象学を捉えている。

第2現象学は、第1現象学がやり残したところから始まる。それは、現象学的方法が達成したことを極めて徹底した意味で容認したうえで、フッサールの形式存在論の広げ深まった問いを、存在の根本的な存在論へと向け変える。その目的は、解釈学と実在哲学の存在論である。(Ihde, 2007, p.18)

フッサールが厳密に形式を追究し、後期思想で到達したのは「生活世界」、すなわち「一切の個別的経験の普遍的基盤として、経験の世界として、一切の論理行為以前に直接にまえてあたえられるような世界」(フッサール, 1975/1939, p.33)であった。平易に述べるならば、「我々は、どのような世界のなかに生きているのか」に対する1つの答えである

と言えるだろう。一方で、「存在とは何か」といった存在への根本的な問いや、「我々は、どのように生きるべきか」といった実存的な問いは残されたままとなった。前者の根本的な問いは、ハイデガー(2015/1927)による『存在と時間』の言葉を借りれば、「時間を解釈することで、時間があらゆる存在了解一般を可能にする地平であることを示すこと」(p.14)によって解明が目指された。アイディは、そこに第2現象学の意義を見いだしている。

第1現象学のキーワードの1つが「経験」であるならば、それに対比される第2現象学のキーワードは「言語」であると考えられる。アイディは第2現象学について、続けて述べる。

第2現象学は、経験の豊かさを追究しつつ、思考の伝統という堆積のなかに、経験それ自体がもつ歴史と時間における本質的な含蓄を見いだす。……私たちの経験が収納される言語、そしてその経験が表現される言語そのものを、再評価し再検討する道を開いたのである。(Ihde, 2007, p.20)

ハイデガー(1996/1985)は「言葉と存在についてよく考えてみるのが、早くから私の思考の道筋を規定していた」(p.106)と述べるように、初期思想から言語に対する関心が高かったと思われる。その言語観も例えば「言葉そのものが語る」(同書、p.14)といったように独自のものを展開している。「本当に言う」こととは、冗長なおしゃべりのなかには現れないし、一方で沈黙であっても現れることがある。ハイデガーは、『『本当に言う(sagen)』とは：示す、現れさせる、見えたり聞こえたりするようにさせる、という意味』(同書、p.312)だと述べる。このように単純に物理的な音声言語を対象とするととまらないハイデガーの言語観が第2現象学には内包されており、「実存」、「歴史」、「解釈」といったその他のキーワードにも結びついているのである。こうした「言語」をキーワードの1つとする第2現象学は、言語におけるきくことの文脈に位置づけられよう。したがって、アイディが第2現象学に基づいて論を展開するにあたっては、言語におけるきくことの文脈が中心的となる、と言える。

2.2.4 近似

アイディにおけるアプローチのもう1つの特徴が、「近似」という概念によるものである。近似は、視覚と聴覚といった2つの異なる次元を想定し、それらがどのようにして相違したり比較されたりするのか、それぞれの形態へとどのように分岐するのか、そしてそれらはどのように重複するのか、といったことに注意を払いながら検討すること(Ihde, 2007, p.49)とされる。『聴くことと声』における研究目的と関連させて捉えるならば、2つの事柄について、どのように比べるのか、どのように分かれていくのか、といったことを考察し、日頃考えないようなことや、当たり前とと思っていることを問い直す、と言えるだろう。『聴くことと声』の前半部では、主に視覚経験と聴覚経験を近似させることによってアイディは後述するような知見を見いだしている。一方、近似の対象になるのはそれだけではない。後述する諸概念も含めると、例えば第1現象学と第2現象学、空間性と時間性、中心と周辺(地平)、知覚と想像、言葉としての言語と意味としての言語、言葉と音楽、言葉と沈黙など、多様な対概念に用いているのである。単一の対概念だけではなく、複数の要素が関連づけられて考察される場合もあるのが興味深い。この近似によって、具体的にどのような知見が生成されるのかについては後述する。

2.2.5 事象そのものへ向かうアプローチとして

第1現象学と第2現象学といったアイディによる捉え方は、例えばコミュニケーション学における研究に援用されている。ラングスドルフ(Langsdorf, 2006)は、抽象的で形而上学的な存在論がコミュニケーション研究を侵食することを懸念する。そこで、「事象そのもの」を聞くことに根差した過程的で関係的な形而上学を現象学のなかに見だし、コミュニケーション的な相互作用の形而上学を目指そうとしている。ラングスドルフによれば、「フッサールの第1現象学からハイデガーの第2現象学への移行は、フッサールの『本質、構造、現前』への関心と、ハイデガーの重要な関心ごとである『実存、歴史、解釈学』を補完する」(Langsdorf, 2006, pp.39-40)という。そうした記述からも、両者の現象学を扱うことによる包括性がうかがえる。前述したアンドルーズ(2013)は、シェフェールをフッサー

ルの現象学によって探究してきたが、『4分33秒』で著名な現代音楽家であるジョン・ケージの作品にそれとは異なる形の実存性を見だし、アイディの第1現象学と第2現象学の位置づけを援用しながら、今後の展望を語っている。

以上のように、第1現象学は知覚経験におけるきくことの文脈に、第2現象学は言語におけるきくことの文脈に位置づけられることを考察してきた。双方の文脈が射程に入れられていることが、アイディの『聴くことと声』の包括性や学際性を示していると考えられる。一方で、それぞれの現象学による探求が分断的になされているとすれば、学際的であるとは言えない。アイディは、「私は、聴くことと声に関して、フッサールの第1現象学のスタイルで探求を始め、様々な近似によって、いっそう実存的な哲学へと移行するつもりだ」(Ihde, 2007, p.20)と道筋を示すが、この記述では始めに第1現象学による論考をし、次に第2現象学の論考をするというように、それぞれが分断的に展開されるとも解釈できてしまう。その点については、実際どのように展開されているのだろうか。

以下では、『聴くことと声』の各章において具体的に論じられている諸概念を中心に、実際の展開を見ていきたい。各章における記述を段階的に追っていくと、その展開は決して分断的ではないことが分かる。すなわち、知覚経験におけるきくことの文脈を中心とした第1現象学で始まり、双方の文脈を往還しながら徐々に言語におけるきくことの文脈を中心とした第2現象学へと移行していく過程が明らかとなるだろう。

2.3 音の空間性と時間性、聴覚の地平構造

2.3.1 視覚経験と聴覚経験の近似

『聴くことと声』の第2部は「記述 (description)」となっており、その皮切りとなる第4章からは、アイディが述べたように主に第1現象学的なアプローチによって探求が始まる。現象学者やその記述に焦点を当てるのではなく、「現象学する (do phenomenology)」ことを試みているアイディは、事象そのものに迫りながら論考を進めていく。第4章では、「近似」のアプローチを用いながら、クリップ、ハエ、ノートルダム大聖堂、暗い田舎道でのフクロウといった事象における視覚経験と聴覚経

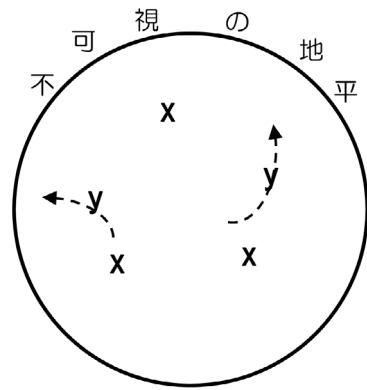


図2. 不可視の地平
(Ihde, 2007, p.52より作成)

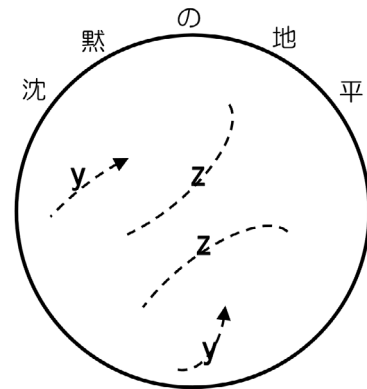


図3. 沈黙の地平
(Ihde, 2007, p.52より作成)

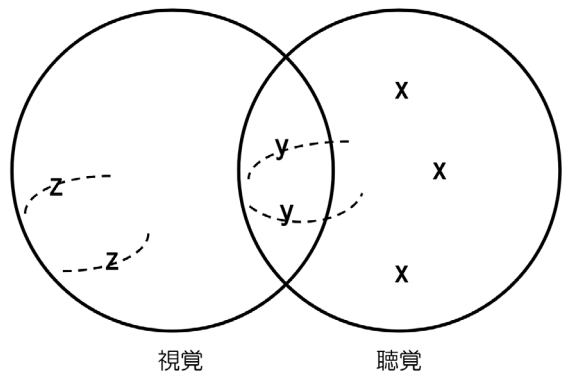


図4. 視覚と聴覚の重ね合わせ
(Ihde, 2007, p.53より作成)

験について探求する。そして、前述した「核-地平構造」を用いて、視覚経験に関する「不可視の地平」(図2)、聴覚経験に関する「沈黙の地平」(図3)、「聴覚と視覚の重なり合い」(図4)を示し、それぞれの特質について論じる。図2のxは不動の実在物を表しており、普段は音を出さない。図2と図3のyは動く実在物で、ときおり音を伴う。図3のzは、視界には入ってこないが音はきこえる、という場合である。そしてこれらを合わせた図4で、アイディは次のように述べ、一方の次元で地平にあるものが他方の次元では現前となることを指摘する。

一方では、音を出さない対象(x)の領域は、それらの対象が沈黙しているため、聴覚経験に閉ざされているように思えるし、他方の聴覚経験では、目に見えない音(z)が耳に対しては現前し、目に対しては地平となる。さらにまた、両方の「感覚」ないし「領域」に「統合」された(y)現前、つまり両方に現れる現前もある。(Ihde, 2007, p.53)

このように視覚、聴覚経験に近似のアプローチで迫った知見は、音楽領域におけるロックヘッド(Lochhead, 2006)の音楽的対象の可視化に応用されている。「聞くことは音楽の理解の十分条件であるという仮定の一方で、他の方法を用いて楽音を『把握する』という試みは、つねに音楽自身を生み出すことと一体になっているように思われる」(Lochhead, 2006, p.68)というように、きくことが主な目的である音楽であっても、そこには視覚的な手立てが包含されているのである。こうしたアイディの知見は、知覚経験におけるきくことの文脈での研究に有用な示唆を与えていると言えよう。

2.3.2 聴覚の空間性

『聴くことと声』の第5章では、聴覚経験が一般的に「時間的」とであるという捉えに対し、アイディは聴覚の空間性に着目する。ただし、「音と時間の深い関係を否定せず、なおかつ時間性に対しての聴覚の豊かさを否定せずに、諸々の近似によって始める」(Ihde, 2007, p.59)と述べるように、ここでも時間性と空間性を架橋するような姿勢で探求する。視覚と聴覚の近似しかり、こうしたアプローチの仕

方は、アイディの思想構造を形成する特質の1つであることが見えてくるだろう。アイディは、箱の中に物を入れて、それを振ったり回したりしながら何が入っているのか当てるというゲームを例に挙げる。この事例では、物が見えなくても音をきけば空間的な形が分かるということが示されている。一方で、即時的に分かる視覚に比べて、聴覚から空間的な形を把握するには時間性が不可欠であることにも触れ、それぞれの特質を明らかにしている。また、目の見えない人の事例を挙げ、音から物の表面が分かることを述べたり、材質の違うカラーボールを叩いて、その内部の材質が判断できることに言及したりしている。とりわけ、後者の「内部を聴く」という様相は、「私の目から隠されたままになっていることは、耳には顕わにされる」(Ibid., p.71)というように、視覚では不可能な空間的把握の意義が見てとれる。

こうした聴覚の空間性に関する議論は、理論的な検討にも実践的な論考にも援用されている。理論的な検討においては、例えば映画学ではジョーダン(Jordan, 2012)が、サウンドスケープ作品によって引き起こされる空間的な気づきについて、映画を観ている間の聴く作用へと拡張させることを試みている。サウンドスケープ作品を生み出す際に作曲家が環境と対話的に介入することによる気づきをノーマン(Norman, 1996)は「省察的聴取(reflective listening)」と呼んだが、ジョーダンはそれを映画への視聴覚的な側面へと発展させ、「省察的視聴覚(reflective audioviewing)」という概念を生成する。そこでの検討で、アイディにおける音の空間性に関する記述のうち、音の反響や残響が形や内側の様子といった気づきをもたらすといった内容(Ihde, 2007, p.57)を取り上げ、省察的聴取と適合するものとして価値づけている。前述のカミンズ(2013)は、視覚と空間の関連性を述べたうえで、聴覚にも空間性が見とれることをコナー(Connor, 1997)による空間性と主観性に関する記述とアイディによる内部を聞く記述(Ihde, 2007, p.70)から引き出し、サウンドスケープの空間性を探求する一助としている。

実践的な「事象そのものへ」向かわせたものとしては、現代芸術領域におけるモイズ(Moise, 2011)が、ハンガリー出身でドイツ在住の現代芸術家であ

るハイナル・ネーメト (Hajnal Németh) の作品を対象とした論考を提出している。モイズによれば、ネーメトの作品は、「単に視覚と聴覚のカテゴリーを融合するというわけではなく、同様に身体と精神を合わせたり、高次の文化と大衆的な文化を合成したりするというわけではない。そうではなく、それらを結びつけることに加えて、同時に各々の芸術作品のまさに対象を取り除いたり消し去ったりするのである」(Moise, 2011, p.78) という。そうした両義的な作品を分析するにあたり、アイディによる「形を聴く」ことをはじめとする聴覚的空間に関する記述を用いている。

2.3.3 音の特質～無指向性、包囲性、浸透性、方向性、貫通性

第6章は、これまでの聴覚における空間的意義や前述の核-地平構造をさらに拡張して展開される。ここでは、聴覚の領野について探求することを通して、音の特質を見いだしている。「右と後ろからの音が、ストーブのファンモーターによるわずらわしいウォーンという音だと見分けられる」(Ihde, 2007, p.75) という事象から、どの方向の音でもきくことができるという「無指向性 (omnidirectionality)」を、「音響的に優れた音楽堂でベートーベンの交響曲第九を聞く」(Ibid., p.76) という事象から音が聴き手を取り囲むという「包囲性 (surroundability)」や「浸透性 (immersion)」をアイディは引き出す。さらに、「背後から来ている車の音を聞くと、それを避けるためにさっと動く」(Ibid.) という事象から、無指向性とは対極となる「方向性 (directionality)」を、そして「ロック・コンサートは、その音楽の底抜けに騒がしい轟音によって、痛みの瀬戸際、まさに限界点へと私を連れていく」(Ibid., p.81) という事象から、音が身体に入りこみ、貫通する「貫通性 (penetration)」を見いだす。

第6章は環境音や楽音をきく事象が多く用いられている。こうした知覚経験におけるきくことの文脈では、例えば音楽教育領域においてデュラ (Dura, 2006) が音楽聴取経験の現象学を論じるにあたり、アイディ (1976=2007) を含めた現象学文献を複数レビューしている。スミス (Smith, 1979) による『楽音を体験すること：音楽の現象

学へのプレリュード (*The Experiencing of Musical Sound: Prelude to a Phenomenology of Music*)』、デュフレンヌ (1953) による『美的経験の現象学 (*Phénoménologie de l'expérience esthétique*)』、パイク (Pike, 1970) による『音楽経験の現象学的分析と関連した小論 (*A Phenomenological Analysis of Musical Experience and Other Related Essays*)』など、音楽もしくは美的経験に焦点化された文献のなかにあって、そうした対象にとどまらないアイディが取り上げられていることから、アイディの知見の汎用性がうかがえる。デュラは、人が日常的な音を音楽的に聴くことを選択することもでき、音に浸されると同時に方向性の感覚も共現前すること (Ihde, 2007, pp.76-77) や、音や音楽における生き生きとした性質は本質的な時間性と結びつくこと (Ibid., pp.82-83) といった第6章のアイディの知見を取り上げるだけでなく、後述するように他の章での知見にも触れながら、音楽の深淵さや畏敬の念を経験する機会をもてるよう初等・中等教育における音楽教育への提言を行っている。

2.3.4 音の時間性

第7章では、アイディは考察を先送りにしていた音の時間性に着目する。前半部では、音の時間性について、リズムの観点から考察を進める。アイディによれば、「聴覚的現前に対するこの日常的でリズムミカルな性質は、日常生活の一部であるリズムによる背景-前景の音という観点から、経験のうちに生ずる最初の変化と流動の秩序である」(Ihde, 2007, p.87) という。いわば日常生活の通奏低音として、自然界であれば風や波の音、人工的なものであれば空調の音など、普段は意識されることのないリズムミカルな音が常に流れているということである。そして、それが「世界に対する聴覚の安定性をもたらす聴覚の質感と背景」(Ibid.) となり、視覚における「静止 (immobility)」と同型の安定性を担うとアイディは述べる。中盤から後半にかけては、フッサール (1967/1966) の『内的時間意識の現象学』と関連づけながら、時間的な焦点をどのように捉えうるのかについて検討する。

こうしたフッサールとアイディを架橋するような論考は、バーガー (Berger, 1999) に見られる。バーガーはデス・メタルの調性⁹⁾ について、フッサール

の『内的時間意識の現象学』の知見から考察している。生き生きとした現在や過去把持、未来予持といったフッサールの諸概念を補足する意味合いで、生き生きとした現在のなかで主体の時間的焦点がどのように移動するのか論じたアイディ (2007, p.89) に触れている。そして、生き生きとした現在の分節で音符を区分するといった、楽典による説明とはまた異なる経験の仕方、調性について記述した。

アイディはこうした時間性を含めて、第5章や第6章の知見を捉え直している。第2部は基本的に第1現象学によって論が展開されているが、そのなかでも行きつ戻りつしながら検討されていることがうかがえよう。アイディの論じるスタイルは、一方向的ではないのである。

2.3.5 聴覚経験の地平

第2部の最後となる第8章では、第1現象学と第2現象学の合流点として、アイディは前述した後期フッサールに見られる経験の「核-地平構造」に着目する。それをさらに発展させた図5「焦点・領野・地平構造」(Ihde, 2007, p.106) では、一方がもう一方を状況づけるという意味で拡張されている。状況づけるとは、一方があることによって、もう一方が成り立つという相関関係のことだと言える。R'では領野が焦点を状況づけ、R''では、その領野が地平によって状況づけられているが、例えば焦点はそれだけでは成り立たず、領野があってはじめて成り立つということである。こうした相互が状況づけられるという関係性が理解されて初めて、不在である

地平は「経験的な現前全体を状況づける開けであると見なされる」(Ibid., p.108) のであり、そうした意味で存在の問いとともに不在の問いも提起する第2現象学との合流点となるとアイディは見ている。

こうした地平概念を教育哲学研究に援用したのは福田 (2008) である。例として、「授業では、授業開始直後は静かであったのに、いつの間にか子どもたちの間で私語が始まり、時間が経つにつれて教室内の騒がしさが段々と高まっていく、といった場合」(福田, 2008, p.281) を挙げ、私語の始まり方の境目が曖昧であることや騒がしさの段階的な高まりに、聴覚的な地平の空間的な意味を見いだしている。ここでの地平は第1現象学的ではあるが、具体的な教育的事象を考察したものとして価値づけられるだろう。

さらにアイディは第8章で「沈黙」概念にも触れ、知覚経験におけるきくことの文脈と言語におけるきくことの文脈の双方に関わる次のような記述を残している。

音楽のフレーズにおけるフェルマータ（終止記号）や休符は、音楽の全体性から引くというより、むしろそれに付け加えをする。話すことにおいては、沈黙はしばしば思考の流れの停止や、話題の変化を意味するが、諸々の沈黙はまた、それら特有の諸意義に満たされる可能性がある。(Ihde, 2007, p.110)

視覚芸術と対比される聴覚芸術の音楽という点で知覚経験の文脈に、話すことは直接的に言語の文脈に位置づけられる。第1現象学と第2現象学の合流点となる地平が、聴覚経験においては沈黙であるならば、これはまた双方の文脈の合流点でもあると捉えられるだろう。沈黙概念については、第3部で主題的に取り上げられるうちの1つとなる。

ここまで、第2部におけるアイディの知見を整理しながら、知覚経験におけるきくことの文脈を中心とした第1現象学と言語におけるきくことの文脈を中心とした第2現象学の展開を見てきた。その結果、第7章までは基本的に第1現象学のアプローチによるものだが、言語におけるきくことの文脈の研究にも妥当する知見があること、第8章は双方の現象学ならびに文脈の合流点となることが考察され

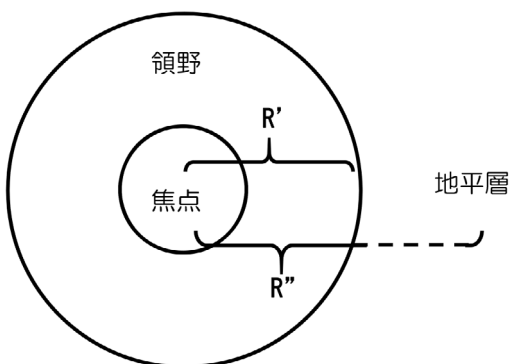


図5. 焦点・領野・地平構造
(Ihde, 2007, p.106より作成)

た。

2.4 想像様態による聴くこと

2.4.1 知覚経験と想像経験による多声性

『聴くことと声』の第3部は、「想像の様態 (the imaginative mode)」となっている。第9章においては、第2現象学としてハイデガーの言語観が引き合いに出される。すなわち、「実存的に、諸々の事物は『語る (speak)』」(Ihde, 2007, p.115) という言語観であり、アイディは他者や神々もまた各々の声をもつと述べる。そして、こうした「〈世界〉の声 (voice of the World)」に加え、自分自身の声を聞くことに触れる。自分自身の声は、物理的な音波として実在する声だけではなく、物理的な音波としては非実在的な想像の声が含まれる。そうした様相をアイディは「多声 (polyphony)」と捉え、「多声には、知覚的と想像的な形式の二重の様式性における声の二重奏がある」(Ibid., p.117) ことに言及する。この経験の多声性を探求するために、アイディは再び第1現象学のアプローチを用いる。これまで知覚経験に重きを置いていたのに加え、フッサールによる自由想像変容を用いているのが、第9章以降の特色であると言えるだろう。「準現前化、例えば、想像というものは、……きわめて完全に明瞭なものであることがありえて、その結果それは、完全な本質把握や本質洞察を可能ならしめるものなのである」(フッサール, 1984/1913, p.22) というように、想像によって諸々の条件を変更することで、不変の構造を見いだすのが自由想像変容という方法である。アイディはこの方法を駆使して、聴覚だけではなく視覚との関連も示唆しながら、経験の多声性について論じていく。

知覚経験にない想像経験の特質として、アイディは「想像的作用の各々の形式における非実在の現前化は、自発的か思いのままかのどちらかを生じさせる」(Ihde, 2007, p.119) ことや、第三者的に外から他者を見るように自分自身を見ることができ、また一方で他者自身にもなりきれれることを挙げる。それから知覚と想像が共現前する様態について考察をし、「隔たり (distance)」と「妨げ (resistance)」という概念を用いて記述していく。アイディは、ヨットの写真を見ながら内言によってヨットについて考えるという事例を挙げる。ここでは、視覚的な

知覚 (ヨットの写真を見ること) と、聴覚的な想像 (内言によってヨットについて考えること) が共現前しているが、その視覚と聴覚という違いを次元の隔たりとしている。一方で、ヨットの写真を見ながらヨットの視覚的な想像をする事例でもまた、想像と知覚の不一致 (隔たり) があることを指摘し、その隔たりが一方の妨げになることに言及する。そして、聴覚と視覚のように異なる次元よりも、同じ次元の知覚と想像の方が、妨げが大きくなるとしている。こうした隔たりや妨げがなくなる共現前の様態を、想像と知覚の合成として捉えている。

こうした経験の多声性の知見は、音楽や声に関する事象へ向けた研究へと発展している。例えば音楽領域では、コサンスとトムリンソン (Coessens & Tomlinson, 2019) が音楽の実践における想像の意義や役割について考察した。知覚と想像との異同や経験との関係、芸術における正確な想像の意義といった観点から論じながら、聴覚的想像と想像的聴取のトピックでアイディに触れている。ここでは、人が話すようになる以前に他者や事物、世界の声を聞いてきたこと (Ihde, 2007, p.115)、意味づけが経験の一部になると、聴覚は以前の経験と想像的に結びつけられること (Ibid., p.117)、外側と内側、知覚と想像経験といった多声性があること (Ibid., p.119) が取り上げられ、その後の音楽実践の考察に生かされている。ジェンダー・セクシュアリティの領域においては、ファン・デル・ヴァル (Van der Wal, 2019) が同性愛者の声に着目し、南アフリカにおける人種、ジェンダー、セクシュアリティをめぐる見解が、音の環境としてどのように生まれるのかを検討した。事例として、南アフリカのアーティストであるウムリロ (Umlilo; 南アフリカで使われているズルー語で「火」の意味) の声と、その楽曲である『ウンザバラゾ (Umzabalazo; ズルー語で「闘争」の意味)』を取り上げている。声の考察にあたり、声は空気や呼吸を通じた身体的なものであるというアイディの知見 (Ihde, 2007, p.3) を取り上げるとともに、その多義性についても「経験の多声性」(Ibid., p.118) や他者の声の浸透性 (Ibid.) に触れながら検討している。結論部で、声は物理的、身体的なだけでなく、ジェンダー、セクシュアリティ、人種が色濃く描写されるような概念的な状況も表すと論じた。

視聴覚における知覚と想像について、事象そのものから考察した論考も見受けられる。音環境芸術領域においてガレルフス (Garrelfs, 2019) は、聴覚が視覚と組み合わせてどのように機能するのか、両者の知覚や意味づけはどのように関連するのかといったことについての本質的な理解を目的として、次のような状況設定からその経験について探求した。すなわち、携帯電話とノイズ・キャンセリング・ヘッドフォンを用いてバスに乗り、実際の視聴覚情報との不一致を生み出す状況設定である。ガレルフスは、その経験についていくつかの観点から探求するなかで、仮想対現実の経験 (virtual versus real experiences) を観点とした節においてマッスミ (Massumi, 2002) による「想像されることとしてのヴァーチャル」と、「経験されることとしてのアナログ」の関係を取り上げる。そして、「区別されたカテゴリというよりも単一のスペクトラムの対極として理解するのであれば、それらは双方を除外するというよりも知覚経験と想像をつなぎ合わせるものとして、違いを隣り合って存在するものとして利用することが可能だ」(Garrelfs, 2019, p.114) と述べたうえで、知覚と想像の関係に内在する複雑性に関するアイディの問い「『第2の声』、つまり想像的な声を私が聴くとき、私が「聞く」ということはどういうことなのか」(Ihde, 2007, pp.117-118) に応答している。ガレルフスは、絶え間なく続く内言が知覚にどのように影響するのかということについて「感覚が混同している状態においては、こうした内言はおそらくそれほど主要なものではなく、『実際の』経験とその概念化との間に生じる相互作用がより目立つようになるのは、まさに(感覚の混同の)減少においてである」(Garrelfs, 2019, p.114) と事象から帰結を引き出している。

2.4.2 想像的な聴覚経験

第10章では、前章での自由想像変容を聴覚次元に焦点化した論考がなされている。そのなかで、前述の隔たりと妨げについても事象をもとに考察している。例えば、「窓を開けたままセッションの練習をする初心者のロックドラマー」(Ibid., p.132) の音は、前述した「貫通性」を伴っているため、その妨げによって内言による思考は困難になる。一方で、コンサートでの知覚と想像の二重化によって「現に

演奏されている主旋律に、擬似-総合的な不協和音や陰影や変奏を、想像的に付加できるようになる」(Ihde, 2007, p.133) といった事象を挙げる。このような想像と知覚の音楽的な聴覚に対して、「哲学は今まで『言語学上の』問題へと注意を払ってきた」(Ibid., p.134) とアイディは述べる。そうした意味では、この知見は他領域へと発展していく可能性が見いだせるだろう。一方で、哲学が言語に関心をもっていたのにもかかわらず、内言についてはほとんど検討されてこなかったことをアイディは示し、内言が不可視であること、そしてなじみ深いゆえに主題化するには困難が伴うことを理由として挙げている (Ibid.)。ここで再び前述したコンサートにおける事象に戻り、こうした事象においては、「内言が消え去るのに気づく」(Ibid., p.135) ことを指摘し、聴覚的想像における内言の位置づけと役割を考察する手がかりとするのである。さらに、耳の聞こえない人にとっての言語による志向の役割についても探求し、「思考は異なる仕方で身体化される」(Ibid.) とし、音や声を身体できく様相に触れる。

アイディの聴覚的想像や身体できく様相に言及した論考は、音楽文化研究の文脈に見られる。ヘシティー (Kheshti, 2011) は、聴覚的想像においてワールド・ミュージックを中心とした文化産業がどのように構造化されるのかを検討した。その考察では、数多くある聴覚的想像の概念のなかでアイディ (2007) を取り上げ、想像された音が音楽家にとって演奏した音楽と同時に経験されるとしている。また、耳の聞こえないパーカッショニストの事例を挙げ、アイディにおける身体的聴取 (Ihde, 2007, pp.135-136) と関連づけた。

2.4.3 内言の特質

内言の役割という問題意識は、第11章でも継続的に取り上げられる。前述した内言のなじみ深さと、一方での見つけにくさと捉えがたさについて、アイディはさらに論じる。その理由として、内言は言語活動へ持続性と意味を与えるものの、その背景として後退していること、内言よりも話している内容に注意が向かうこと、聴覚的想像の他の様態とは異なるあり方を内言は有していることが述べられる。そして、他言語の内言によって思考すること、内言の速さや抑揚、未知なるものに遭遇するときの内言と、

多様な視角から検討を行い、最終的に「言葉は、言語が意義のある現象として〈世界〉を『存在せしめる』というような仕方、私自身に住まう」(Ibid., p.144)と結論づけるのである。

教育研究における内言は、思考の発達と結びつけられて論じられることが中心的であるが、福田(2008)は、アイディの内言の捉え方について「内言と思考とのつながりを重視しながらも、思考活動において生じる内言に限らない、様々な内言に着目する」(福田, 2008, p.283)と評価する。そして、授業中に教師の説明が理解できなくなった場合にも、内言が自分の理解へと引きつける機能を果たしている(同書)。福田はさらに内言の概念を発展させ、「声にならない声は、それに直面した教師に、クラス全体に共有されている授業の展開の仕方への不満や違和感を示すものとしてすぐさま捉えられるという点で、内言の一典型である、とみなすことができる」(同書, p.285)とし、個人的な内言が間主観性や普遍性とも直結していると指摘した。このように、アイディの内言の捉え方を出発点として教育事象と関連づけることで、アイディ自身が明らかにしえなかった内言のさらなる可能性に言及している。

第3部では、自由想像変容という第1現象学における方法を用いながら、第2現象学のキーワードである言語を中心とする話題へと推移していった。各章ともに第2部に比して言語におけるきくことの文脈が色濃くなってきているが、知覚経験におけるきくことの文脈にも触れながら論が展開されていることが明らかとなった。

2.5 声、言葉、沈黙

2.5.1 言葉としての言語、意味としての言語

最終部となる第4部は「声」という題になっており、『聴くことと声』のタイトルからしても、重要な論考となる。第12章では、ここまで述べられてきた言語が拡張される。すなわち、「言葉としての言語 (language as word)」と「意味としての言語 (language as significance)」である。前者は、日本語や英語のように「言語の『言語学的』な形式」(Ihde, 2007, p.147)をもつ言語であり、一般的な言語観と符号するものと言えよう。後者は、「人間の範囲内で聞かれるもの、理解されるもの、知覚され

るものは、既に意味をうちにひめたものとして受け取られる」(Ibid., p.148)という点から導かれる言語観で、楽音や周囲の環境音をはじめ、ジェスチャーや表情、触れることなども含まれる。アイディはリクールを引き合いに出し、「意味もしくは意義は、知覚と言葉との両方にすでにある」(Ibid.)と述べる。このことから、第1現象学もしくは「みる・きく」を中心とする知覚経験の文脈と、第2現象学もしくは「はなす・きく」を中心とする言語の文脈とを意味が架橋すると言えるだろう。このような広義の言語観もまた、アイディの包括性や学際性を示していると考えられる。前述したハイデガーにおける「事物が語る」といった言語観にも通じるものがあるだろう。

ここからアイディは、前述の焦点-領野-地平構造と広義の言語観を関連させて捉え、日常的には「言葉としての言語」が焦点にあり、「意味としての言語」は領野もしくは周縁部に位置すると述べる。そして、中心は周縁によって脱中心化されることがあるという可能性や、共現前についても示唆する。また、この焦点-領野-地平構造には、焦点に「言われること」、地平に「言われないこと」があり、相互に状況づけているという関係性に触れる。アイディは議論をさらに発展させ、話し言葉と書き言葉を近似させる。検討した結果、「声、声に出して読むこと、読むことのみに伴う内言、声に出さずに読むこととの間の連続体」(Ibid., p.152)という様相を見いだすのである。

こうした言語観の拡張を論じた第12章は、次のような論考で援用されている。例えばリマー(Rimmer, 2013)は、メディア研究者であるクドゥリー(Couldry)の「声 (voice)」の概念に着目する。「声」は、クドゥリーによれば「自分自身に関して説明すること」(Couldry, 2010, p.3)と定義されるが、リマーはその声を人間の語り限定せず、そこに語りと音楽の結合された機能を見いだそうとする。その論の補強としてアイディの多声性を取り上げ、「音楽は『声』にとっての1つの表現手段として適切に理解される可能性があることは明らかであるように思われる」(Rimmer, 2013, p.141)と考察した。音楽が「意味としての言語」として捉えられるのであれば、声の表現手段としての可能性が見出されるということである。バス(Basu, 2014)は、

精神医学における声と、インドのグジャラートにあるイスラムのスーフィー教寺院において実践されている儀式的療法における声について考察した。ヒンドゥー教やキリスト教では視覚が重視されるのに比してイスラム教では聞くことが特別な地位を占めていることを挙げ、そこで「聞くことは、音を通して我々を世界に関わらせることを可能にする基本的な感覚形態である」(Basu, 2014, p.328)と述べる。そして、そうした音は多様な「声」として理解されるというアイディ (2007, p.147) の記述を取り上げ、声の特質に迫っていく。ここでも、音が「意味としての言語」を有するものと見なされ、声と関連づけられている。アイディの考察は、音と声の双方の橋渡しとしての役割を担っていると思われる。

2.5.2 内的な踊り、言葉の音楽、音楽の文法

第13章では、音楽と言葉についての検討が展開されている。アイディはまず、器楽曲のように言葉を用いない音楽に着目し、こうした音楽の聴取は言葉によって要求される聴取とは異なる、難解な身体化された現前であると捉える (Ihde, 2007, p.155)。そして、音楽のデモーニッシュ¹⁰⁾な性質は、聴くことが音楽のリズムを共にする身体的聴取に引き込まれる可能性から生じるとし、アイディ独自の「踊り (dance)」を提示する。その踊りとは、文字通りの踊りではなく、「ダンス・ミュージックやロック・フェスティバル、宗教の伝導集会に見られる自然と身体が動き出すような実際の踊りから、バロック音楽を静かに聴いている際の、身体的に感じるリズムや変化という『内的な』踊りにまで及ぶ範囲」(Ibid., p.156)であるという。このような踊りへの魅力が身体を引きつけるような捉え方は、心身二元論とは対極的な反デカルト主義的であるとアイディは論じ、今まで述べてきた聴覚的空間の観点から、空間的な隔たりがなくなるような体験である音楽的忘我と踊りへの魅力を結びつける (Ibid.)。

言葉と音楽を近似させながら、アイディは「言葉の音楽」と「音楽の文法」といった類似性を見つける。前者について、アイディは「男性が怒った叫びは私を驚かせることができるし、私はその語気に脅威を感じる。女性の囁き声は、心がうばわれるように聞こえる魅力となる」(Ibid., p.157)と例示する。これは「声の演出法 (a dramaturgy of voice)」と

も言えるもので、第15章で主題的に取り上げられるものである。その他にも、自分にとって明白ではない言語は一種の音楽のように聞こえるともアイディは述べる。後者は、音楽は一定のスタイルを有していることであり、アイディは「ローリング・ストーンズをモーツァルトと間違える人はいないし、いっそう学んだ人は、ヘンデルとハイドンを間違えることはない」(Ibid.)と例に挙げ、最初は奇妙に聞こえるインド音楽すら、学習すれば最も高度に音が類別された音楽の1つであることを示すのである。

前述したデュラ (2006) は、耳から知覚される感覚データとして音楽を捉えるのではなく、聴き方の姿勢や聞いたことからの意味づけといった過程に左右される「現前そのもの」であるというスミス (1979) による捉え方と、アイディの概念を関連づける。そして、アイディの身体的な聴取や「踊り」について、音楽を単なる対象にとどまらないものと捉えていることを評価した。デュラの論考は理論的な考察であり、具体的な事象そのものを記述したものではないが、音楽教育の文脈において、アイディの言葉と音楽の捉え方が有用となる可能性を示していると見えよう。

2.5.3 沈黙と言葉

第14章では、沈黙と言葉についての考察がなされている。アイディは第8章において地平構造について論じているが、それと関連づけ、沈黙としての地平には3点の意味があると述べる。1つは「不在という何も無いことへと次第に小さくなる限界」(Ihde, 2007, p.161)としての地平である。聞こえる音や声は、時間的にも空間的にも中心と周縁に位置づけられ、いずれきこえなくなる場合に沈黙となる。その限界点という意味での地平である。これは、後期フッサールにおける地平の捉え方を沈黙概念に関連づけたものであると見えよう。そしてもう1つは、中心を状況づけたり取り囲んだりするという意味での「〈開け〉としての地平」(Ibid.)である。日常的には中心に位置づけられる聞こえる音や声は、沈黙があるからこそ中心に位置づくのであり、それはまた存在の問いや不在の問いにもつながってゆく。そうした意味で、ハイデガー的な地平の捉え方であると言えらる。

この2つの意味はこれまでアイディが述べてきた

ことであるが、第14章では第3の意味としての沈黙の地平が主題的に論じられている。すなわち、「言われること」を状況づけるという意味での「言われないこととしての地平」(Ibid.)である。これはアイディ独自の地平の捉え方であると考えられ、第1現象学と第2現象学の要素が盛り込まれている。第1現象学的な知覚経験の文脈では、アイディは視覚経験における地平と近似させることでその特質を見いだす。例えば、ブロックの側面を見ているときに、その反対側の側面は見えていないものの、潜在的に意味をもつものとして現前する。それを聴覚経験に近似させ、かつ第2現象学的な言葉の観点から捉え直すならば、ある言葉をきくこと(言われること)は、直接的にはきかれないこと(言われないこと)の意味を潜在的に含むということになる。アイディによれば、「あらゆる言われることのなかには、言われないことの潜在的な地平があり、それは言われないことを状況づける」(Ibid., p.162)のである。

この3点目の捉え方について、アイディは専門用語を例に、学習段階によってその専門用語の意味の潜在的な言われないことへの理解が異なることを挙げる。「学習者は、言われないことので地平の意味が反響したり響き渡ったりするのを聞くことを学ぶ」(Ibid., p.163)ことで、専門用語の意味が次第に直感的に分かるようになるとアイディは述べるのである。そして、前述した2つの「限界としての地平」、「開けとしての地平」が周縁を超えたところに位置づけられるのに比して、この「言われないこととしての地平」は中心に近い地平へ位置づけられる可能性をアイディは示唆する。例として詩の言葉を引き合いに出し、詩の創造が、「言われないこと」、「言われなかったこと」を新たな文脈の「言うこと」へともたらずと述べる(Ibid., p.164)。さらにハイデガーの言語論と地平の関係を検討し、「哲学的な詩的表現は、言葉としての言語をそのように開くことだ。それは、沈黙に語らせることである。沈黙は地平であり、言葉はその地平に向けて開く。意味がより深く集められることを可能にする、いっそう広い開けである」(Ibid., p.165)とその可能性を指摘した。

こうしたアイディ独自の沈黙としての地平の捉え方によって、第1現象学と第2現象学を地平概念が結びうる第8章の位置づけがより鮮明になるだろ

う。

2.5.4 演出上の声

第15章は、前述の「演出上の声」が主題的に論じられている。『聴くことと声』の第4部においては、言葉と音楽が取り上げられてきたが、この「演出上の声」はそれらの間に位置づけられるとアイディは述べる。すなわち、「言葉を用いることなく私たちを音へと非常に深く引きつけることができるため、その音が私たちを圧倒するという音楽の魅力と、音声化される意味を隠すという、取るに足りない明白なことに取って代わられる日常の話し言葉による会話との間」(Ihde, 2007, p.167)である。今までの記述を踏まえるならば、「言葉としての言語」と音による「意味としての言語」が、他の場合よりも十全に現出するという意味が見いだせるだろう。

そして、この演出上の声は非日常的な側面も有する。その例として、アイディは劇や儀式、礼拝、詩の朗読といった非日常的な場面における声に着目する。古代ギリシャ劇では俳優が仮面を使用するが、仮面を意味する「ペルソナ(persona)」は「音を通す(per-sonic)」が語源であるとされている。仮面をつけることは、視覚上の変貌が主な役割と一般的には考えられているが、語源においては声の変貌が第一義なのである。それゆえ、アイディによれば「鳴り響く声は、私の自己現前へ貫通するとともに、他者性の現前でもある(Ibid., p.171)」という。その一方で、劇における演出上の声は、自己と他者を同じ次元上にはおかない、とアイディは述べる。「俳優の声は、自己を覆いつくしはしない。他者が前景に現れる間でさえ、相変わらず特有のものである俳優の声には、あるスタイルがある」(Ibid.)という点で、演出上の声は自己と他者を結びうるのである。

こうした俳優の声が人間の他者を体現できることに対し、アイディは礼拝式の司祭における神々の言葉と声という別の可能性に触れる。複数の宗教礼拝について記述しながら、偶像崇拝が禁じられる一方で神の話し言葉を書き言葉で表現されることは禁じられなかった古代ヘブライ人の伝統を取り上げ、「目に見えない神は不在なのではなく、神の言葉のうちに現前する」(Ibid., p.174)と声の重要性を指摘する。礼拝式の司祭は、他者性の根源的な究極の状態である神を、その声の現前のうちに経験させる

のである。

詩人の声については、音楽に近いとアイディは論じ、その範囲が「讚美歌による礼拝的なものや、叙事詩による演劇的なものにまで及ぶ」(Ibid., p.175)ことを挙げる。加えて、他者の声や神々の声以上に、詩人の声は自然環境や人工的環境といった事物にまで拡張される点に、アイディはその特質を見いだしている。そして、詩の中でもわずかな言葉によって表現される俳句に着目し、想像する豊かさを指摘する。これは、第14章の沈黙としての地平における「言われないこと」について、わずかな言葉による詩が豊かに引き出す可能性を有しているということだろう。

このように、演出上の声は他者、神々、事物といった声を表現しうる。アイディが「人間の声の十全な範囲の至るところでの鳴り響く意義の諸可能性を増幅する」(Ibid., p.176)と述べるように、非日常的な行為でありながらも、日常に深く根づいていると考えられよう。

2.5.5 表情、声、沈黙

第16章は、『聴くことと声』の第1版における最終章となり、それまでの知見を踏まえた総合的な論考となっている。この最終章では、表情と声と沈黙の関係に焦点が当てられる。アイディはまず、「意味としての言語」として捉えうる表情が独自の多声的な役割をもち、中心に位置づけられる「言葉としての言語」と関係して「意味を有する沈黙」(Ihde, 2007, p.177)という含みがあるとする。こうした記述を出発点に、地平の構造を捉え直している。アイディによれば、この意味を有する沈黙は、「中心である話し言葉を取り囲む、最も近い地平の様相である」(Ibid., p.179)という。その位相にはまた、「他者には隠されたままである内言の『沈黙した声』の隠蔽性が残る」(Ibid.)と、外側からみた内言の沈黙が位置づけられる。そして、その双方を超えたところに、「最終的な地平の〈開け〉の沈黙」(Ibid.)があると捉えるのである。第14章における沈黙としての地平について、視覚的な表情に付随する沈黙も含めて捉え直していると言えるだろう。

こうした沈黙の価値を論じつつ、アイディは「聴くことの倫理学」(Ibid., p.181)について考察する。そこでは、「沈黙に対する敬意が、その倫理学にお

ける一部を担うにちがいない」(Ibid.)とされている。例えば、独裁者による言論統制は言語を1つの意味にコントロールしようとする試みであるが、話をしなくても沈黙を保つことで、表情も含めた「意味としての言語」は生じうる。そうした支配的なコントロールを拒絶しようという意味において、沈黙は倫理的な側面を有すると言える。そのような沈黙はまた、どのように生きるべきかといった実存的諸可能性を生じさせるという点で、そこから「聴くことと声の存在論」(Ibid.)が構成されるとアイディは述べる。最終的にアイディは、第1章の冒頭に示した記述「人間の始まりは、言葉の中心にある」ということと照らし合わせ、「言葉は沈黙の中心にある」(Ibid., p.181)と結論づけるのである。

聴くことの倫理学については、メディア領域においてクロフォード(Crawford, 2009)が事象そのものへ結びつけて論じている。クロフォードは、オンライン上における注意の向け方のためのメタファーとしての聴くこと概念について、ツイッターを事例として考察した。ネットワーク上でも、ユーザーが「声」を持っていることから、読むことではなく聴くことをメタファーとしている。クロフォードは、つぶやきが更新されることで、過去のつぶやきが瞬く間に背景となる様相での「背景における聴くこと」、政治家にとっての「互恵的な聴くこと」、消費者や生産者にとっての「委ねられた聴くこと」といった様相をツイッターに見いだす。そして、今後もネットワークメディアにおける聴くことは急速に発展していくことを予見するとともに、アイディにおける聴くことの倫理学としての沈黙への敬意について触れる。その上で同等に、増加、多方面化する注意の要求や、一斉に発せられる諸々の声を聴く力の進展を求めた。

第4部では、言語が主題となっていることから、第2現象学のアプローチによるところが大きい。そういう点では言語の文脈で捉えられることが多いが、「意味としての言語」は表情やジェスチャー、話し声の抑揚なども含むという点で、知覚経験の文脈でも捉えうるし、地平は第1現象学でも重要な概念でもある。このように、ときに知覚経験の文脈や第1現象学へと戻りながら、段階的に第2現象学ならびに言語の文脈へ移行していったことがうかがえるだろう。

3. きくことの構造から見る教育的意義

3.1 各概念から構造化されるアイディにおけるきくこと

ここまで、アイディのアプローチと関連づけながら、各章における諸概念を俯瞰してきた。諸概念を総合的にまとめると、以下のようなアイディにおけるきくことの構造が見られると言えるだろう。すなわち、視覚と経験について自明視されているあらゆる信念にともなう現状から脱却し、全く異なる経験理解へと、聴覚経験の現象学に根ざした経験理解へと移行することを目的として、「現象学する」ことを念頭に置きながら、フッサールの第1現象学において主に知覚経験の文脈から、近似によって「音の空間性と時間性（無指向性、方向性、包囲性、貫通性）」によるきくことの特徴を捉え、自由想像変容によって「想像と内言（隔たりと妨げ）」について考察するとともに、ハイデガー的な第2現象学において主に言語の文脈から、「経験の多声性」、「言葉としての言語／意味としての言語」、「言語と音楽と沈黙」について実存的な考察をし、その合流点を

「聴覚の地平構造」に見いだしており、双方の文脈を架橋するスタイルが学際性や包括性を担保している、ということである。構造図を図6として示す。

このように、第1現象学と第2現象学を往還しながら「現象学する」スタイルで、学際的に経験や言語についての構造や実存を探求したという方向性が、アイディのきくことの構造に見られると言えるだろう。アイディの知見が、ここまで関連づけてきた哲学、文学、現代美術、音響芸術、音楽、現代音楽、教育哲学、音楽教育、文化人類学、映画学、音楽文化、ジェンダー・セクシュアリティ、メディア、といった多様な研究領域の理論研究ならびに実践研究に援用されていることから、この知見の射程の広がりがうかがえる。

3.2 教育学領域における現代的課題への応用可能性

アイディの『聴くことと声』における諸概念や知見は、前述のように多領域で用いられているが、こうした広い射程に应用できるということだけでは、その考察に深まりを見いだすことは難しい。アイディの諸概念や知見の汎用性からさらなる考察を深めていく、すなわち「広げ深まり」を体現するに

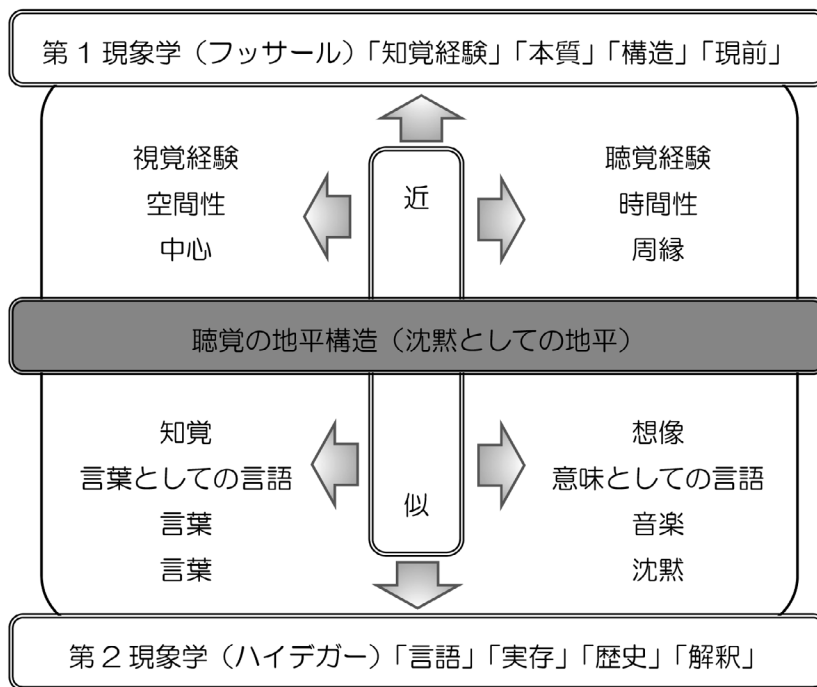


図6. アイディにおけるきくことの構造

は、次のような方向性が考えられる。ある領域にとどまり、その領域内でアイディの諸概念や知見を網羅的に関連づけていくという方向性である。本稿においては、筆者の関心領域である教育学に定位して試みたい。教育学領域におけるアイディの諸概念と知見を用いた先行研究は、既述したように教育哲学における福田（2008）や音楽教育学におけるデュラ（2006）に見られる。福田（2008）においては視覚主義、内言、地平といった諸概念が主題的に論じられ、デュラ（2006）においては音の包囲性や方向性、浸透性、時間性、聴くことの身体性といった諸概念が取り上げられており、それぞれに理論的な考察を深めている。一方で、アイディの諸概念が網羅的に取り上げられているとまでは言えず、また具体的な実践には触れていないことから、「広げ深まり」については課題を残している。そうした意味で、アイディの知見や諸概念を基に理論と実践を対象としながら、論考を広げ深める意義と可能性が、教育学領域には残されていると言えるだろう。

アイディの『聴くことと声』における知見と諸概念は、教育学における現代的課題へ応用できる可能性を有していると考えられる。ここでは、現代的課題のキーワードとして着目されている「見方・考え方」と「主体的・対話的で深い学び」の2観点から、教育的意義を素描したい。

まず、「見方・考え方」についてである。アイディのきくことの構造には、既存の視覚主義的な見方・考え方を捉え直すという目的が通底している。つまり、日常的に当たり前となってしまっている事柄に対し、その当たり前を問い直す原動力を有しているということである。例えば、各章における諸概念や知見を基に、以下のような問いを設定することが可能だろう。

○第4章：視覚経験と聴覚経験の近似

「日常では、見ることときくことは区別されているのか？ その関係はどのようなものなのか？」
→見ることときくことの双方の経験を捉え直すきっかけに

○第5、6章：音の空間性と時間性

「絵画と音楽のように、見ることは空間的で、きくことは時間的なのか？」
→見ること＝空間的、きくこと＝時間的という先

入観を捉え直すきっかけに

○第7、8章：中心と周縁（地平）

「世界が『安定している』と思える理由は、どこにあるのか？」

→中心から周縁に耳を傾けるきっかけに

○第9、10、11章：知覚と想像

「そもそも、我々は日常で何をどのようにきいているのか？」

→きくことを柔軟に捉え直すきっかけに

○第12、15章：言葉としての言語、意味としての言語

「対話は、『相手の話し言葉とのやりとり』なのか？」

→対話や他者の概念を捉え直すきっかけに

○第13、15章：言葉と音楽、演出上の声

「日常的に言葉と音楽をきくことは区別されているが、その関係はどのようなものなのか？」

→言葉のきき方や音楽のきき方を捉え直すきっかけに

○第14、16章：言葉と沈黙

「『沈黙すると気まずい』という先入観から抜け出すにはどうすればいいか？ 沈黙の意義は何か？」

→沈黙を肯定的に捉え直すきっかけに

こうした諸々の問いを設定することで、きくことに関する既存の見方・考え方を捉え直すきっかけが生じうる。世界に対する見方・考え方が変容する機会をアイディの『聴くことと声』は提供してくれるのである。教育的に見れば、変容と成長は深い結びつきにある。そうした意味で、教育的意義が見いだせるだろう。

「主体的・対話的で深い学び」については、とりわけ第9章以降の諸概念や知見が有効であると考えられる。前述の第12、15章において考えられる問い「対話は、『相手の話し言葉とのやりとり』なのか？」というのは、一般的に対話と言えれば人間の他者がおり、その相手と話し言葉によってやりとりをするものだと考えられがちなのである。しかしながらアイディの「意味としての言語」、「内言」といった諸概念や知見を援用すれば、まず他者概念が拡張される。すなわち、人間の他者だけではなく、楽音、環境音といったあらゆる音も「意味としての言語」としてききうるということから、世界の諸事物もまた他者として捉えることが可能となるのである。ま

た、音声言語や楽音、環境音といった物理的な音声だけではなく、内言による「自己内対話」を含むという点で、沈黙からでも対話が生じうる可能性が出てくる。このように対話の概念を捉え直すことで、世界はあらゆる音や声からの「意味としての言語」に満ちあふれており、そこから対話が始まる可能性が示唆されるのである。これもまた教育的に見れば、あらゆる機会が教育の場になるという意義として価値づけられると考える。

このように、アイディの『聴くことと声』における諸概念や知見は、教育学領域における現代的課題へ応用できる可能性を有しているのである。

おわりに

本稿では、『聴くことと声』の具体的な記述を追いながら、アイディにおけるきくことの構造について検討し、その教育的意義について素描した。汎用性のあるアイディの知見を「広げ深める」ための方向性が明確になったと言えるだろう。これを踏まえて、今後は知覚経験と言語の双方の文脈における理論研究と実践研究にアイディの知見を援用していきたい。

註

- 1) 科学理論が、観察可能な現象を組織化・予測するための形式的な道具・装置・手段であると見なされる立場。主に科学哲学において見られる用語である。
- 2) non-foundationalismの訳出。反基礎づけ主義(anti-foundationalism)とも呼ばれる。リチャード・ローティに代表され、知識の絶対的な基盤の存在があるとする基礎づけ主義に対し批判的な立場。
- 3) reduction to visionの訳出。あらゆる知覚経験を視覚主義的にとらえること。例えば科学技術分野では、聴覚や触覚によって知覚される音や振動を、波形として可視化してスクリーンに映し出すオシロスコープなどがある。
- 4) reduction of visionの訳出。視覚そのものを要素還元的にとらえること。見えるものを細分化し、分子、原子レベルまで還元する。科学技術分野で言えば、天体望遠鏡や顕微鏡の発明が該当す

- る。
- 5) sound (音)とlandscape (風景)からなる造語。「音の風景」と訳される。カナダの音楽家であるマリー・シェーファーが提唱した。
- 6) multidisciplinaryの訳出。多専門性においては、多領域が対象となるものの、領域間での相互作用が見られない。一方で、学際性(interdisciplinary)では、領域間での相互作用があり、そこから新たな知見が創成されていく。
- 7) 人や動物の声、自然界から発せられる環境音、都市や電車における騒音、楽音、電子音、楽曲といった様々な音を録音、加工し、再構成して創作される作品。
- 8) 時間性を特徴づける「将来性」、「既往性」、「現在」の3つの現象のこと。「己れの外」という性格をもつことから、脱自と呼ばれる。
- 9) tonalityの訳出。あるひとつの音(主音)を中心として、各音・各和音の性格・役割が体系的に決定されていること。例えばハ長調であれば、Gの和音(ソ・シ・レ)は導音と呼ばれ、Cの和音(ド・ミ・ソ)へ導くような役割がある。
- 10) 理性では解き明かしえない、超自然的なさま。それゆえ、魅惑的な要素も併せ持つ。

引用文献

- Andrews, I. (2013). Sonic practice as research: The problem of aesthetics. *New Scholar: An International Journal of the Humanities, Creative Arts and Social Sciences*, 2 (1), 69-82.
- Basu, H. (2014). Listening to disembodied voices: anthropological and psychiatric challenges. *Anthropology & Medicine*, 21 (3), 325-342.
- Berger, H. (1999). Death metal tonality and the act of listening. *Popular Music*, 18 (2), 161-178.
- Coessens, K., Tomlinson, C. (2019). On the sensorial of imagination. In Kathleen Coessens (ed.), *Sensorial Aesthetics in Music Practices*. Leuven: Leuven University Press.
- Connor, S. (1997). The modern auditory I. In Roy Porter (ed.), *Rewriting the Self: Histories from the Renaissance to the Present*. London and New York: Routledge, 203-223.
- Couldry, N. (2009). *Why Voice Matters: Culture and Politics After Neoliberalism*. London: Sage.
- Coutts, D. (2017). Ontological vibrations in Merleau-Ponty: Metaphor, voice, and linguistic figuration. *Gnosis*, 16, 14-26.
- Crawford, K. (2009). Following you: Disciplines of listening in social media. *Continuum: Journal of Media & Cultural Studies*, 23 (4), 525-535.

- Cummins, J. (2013). The sound and silence of central Queensland: Listening to Alex Miller's soundscapes in *Journey to the Stone Country and Landscape of Farewell*. *Journal of the Association for the Study of Australian Literature: JASAL*, 13 (2), 1-12.
- デリダ, J. (2005/1967). 『声と現象：フッサールの現象学における記号の問題入門』（林好雄, 訳）. 筑摩書房.
- Dufrenne, M. (1953). *Phénoménologie de l'expérience esthétique*. Paris: Presses Universitaires de France.
- デュフレンス, M. (1995/1991). 『眼と耳：見えるものと聞こえるもの』（椋優, 訳）. みすず書房.
- Dura, M. T. (2006). The phenomenology of the music-listening experience. *Arts Education Policy Review*, 107 (3), 25-32.
- 福田学 (2008). 教育研究における現象学的聴覚論の意義：イーデ『聞くことと声』に定位して. 『東京大学大学院教育学研究科紀要』48, 277-286.
- Garrelfs, I. (2019). Override: An experiment in interrupting the congruity of audio-visual relationships. *Sound Effects: An Interdisciplinary Journal of Sound and Sound Experience*, 8 (1), 104-121.
- Gershon, W. S. (2011). Embodied knowledge: Sounds as educational systems. *Journal of Curriculum Theorizing*, 27 (2), 66-81.
- ハイデガー, M. (1996/1985). 『ハイデッガー全集 第12巻：言葉への途上』（亀山健吉, ヘルムート・グロス, 訳）. 創文社.
- ハイデガー, M. (2015/1927). 『存在と時間1』（中山元, 訳）. 光文社.
- ハイデガー, M. (2020/1927). 『存在と時間7』（中山元, 訳）. 光文社.
- フッサール, E. (1967/1966). 『内的時間意識の現象学』（立松弘孝, 訳）. みすず書房.
- フッサール, E. (1975/1939). 『経験と判断』（ラントグレーベ, L., 編, 長谷川宏, 訳）. 河出書房新社.
- フッサール, E. (1979/1913). 『イデー I - I』（渡辺二郎, 訳）. みすず書房.
- フッサール, E. (1984/1913). 『イデー I - II』（渡辺二郎, 訳）. みすず書房.
- フッサール, E. (1997/1958). 『現象学の理念』（長谷川宏, 訳）. 作品社.
- Ihde, D. (1971). *Hermeneutic Phenomenology: The Philosophy of Paul Ricoeur*. Evanston: Northwestern University Press.
- Ihde, D. (1973). *Sense and Significance*. New York: Humanities Press.
- Ihde, D. (1976). *Listening and Voice: A phenomenology of sound*. Athens, OH: Ohio University Press.
- Ihde, D. (1977). *Experimental Phenomenology: An Introduction*. New York: G. P. Putnam's Sons.
- Ihde, D. (1979). *Technics and Praxis: A Philosophy of Technology*. Dordrecht: Reidel.
- Ihde, D. (1983). *Existential Technics*. Albany: State University of New York Press.
- Ihde, D. (1986). *Consequences of Phenomenology*. Albany: State University of New York Press.
- Ihde, D. (1990). *Technology and the Lifeworld: From Garden to Earth*. Bloomington: Indiana University Press.
- Ihde, D. (1991). *Instrumental Realism: The Interface between Philosophy of Technology and Philosophy of Science*. Bloomington: Indiana University Press.
- Ihde, D. (1993a). *Philosophy of Technology: An Introduction*. New York: Paragon House.
- Ihde, D. (1993b). *Postphenomenology: Essays in the Postmodern Context*. Evanston: Northwestern University Press.
- Ihde, D. (1998). *Expanding Hermeneutics: Visualism in Science*. Evanston: Northwestern University Press.
- Ihde, D. (2002). *Bodies in Technology*. Electronic Mediations Series. Vol. V. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Ihde, D. (2006). Forty Years in the Wilderness. in Evan Selinger, E. (ed.). *Postphenomenology: A Critical Companion to Ihde*. Albany: State University of New York Press. 267-290.
- Ihde, D. (2007). *Listening and Voice: Phenomenologies of sound (2nd edition)*. Albany: State University of New York Press.
- Ihde, D. (2008). *Ironic Technics*. Copenhagen: Automatic Press / VIP.
- Ihde, D. (2009). *Postphenomenology and Technoscience*. Albany: State University of New York Press.
- Ihde, D. (2010a). *Embodied Technics*. Copenhagen: Automatic Press / VIP.
- Ihde, D. (2010b). *Heidegger's Technologies: Postphenomenological Perspectives*. New York: Fordham University Press.
- Ihde, D. (2012). *Experimental Phenomenology: Multistabilities (2nd edition)*. Albany: State University of New York Press.
- Ihde, D. (2016a). *Acoustic Technics*. Lanham, MD: Lexington Books.
- Ihde, D. (2016b). *Husserl's Missing Technologies*. New York: Fordham University Press.
- Ihde, D. (2019). *Medical Technics*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Jay, M. (1993). *Downcast Eyes: The Denigration of Vision in 20thC French Thought*. Berkeley: University of California Press.
- Jordan, R. (2012). The ecology of listening while looking in the cinema: Reflective audioviewing in Gus Van Sant's *Elephant*. *Organised Sound*, 17 (3), 1-9.
- 神林哲平 (2019). 「きく」 ことに関する現象学的知見の比較検討：教育研究への展開の意義. 『学ぶと教えるの現象学研究』18, 55-62.
- Kheshti, R. (2011). Touching listening: The aural imaginary in the world music culture industry. *American Quarterly*, 63 (3), 711-731.
- Langsdorf, L. (2006). The primacy of listening: Toward a metaphysics of communicative interaction. In Evan Selinger (ed.), *Postphenomenology: A Critical Companion to Ihde*. Albany: State University of New York Press. 37-47.
- Lochhead, J. (2006). Visualizing the musical object. In Evan Selinger (ed.), *Postphenomenology: A Critical Companion*

- to *Ihde*. Albany: State University of New York Press. 67-86.
- Massumi, B. (2002). *Parables for the Virtual Movement, Affect, Sensation*. Durham, NC: Duke University Press.
- Moise, G. (2011). "I hear with my whole body" Hajnal Németh's dislocated sonorous bodies. *Film and Media Studies*, 4, 75-88.
- 森美智代 (2011). 『〈実践=教育思想〉の構築: 「話すこと・聞くこと」教育の現象学』 溪水社.
- Norman, K. (1996). Real-world music as composed listening. In K. Norman (ed.), 'A Poetry of Reality: Composing with Recorded Sound', special issue, *Contemporary Music Review*, 15 (1-2), 1-27.
- Pike, A. (1970). *A Phenomenological Analysis of Musical Experience and Other Related Essays*. New York: St. John's University Press.
- Rimmer M. (2013). Can you hear me now? Musical values, education and 'voice'. *Media International Australia*, 148, 135-144.
- Selinger, E. (ed.) (2006). *Postphenomenology: A Critical Companion to Ihde*. Albany: State University of New York Press.
- Smith, F. J. (1979). *The Experiencing of Musical Sound: Prelude to a Phenomenology of Music*. New York: Gordon and Breach.
- Sobchack, V. (2005). When the ear dreams: Dolby digital and the imagination of sound. *Film Quarterly*, 58 (4), 2-15.
- Sobchack, V. (2012). Fleshing out the image: Phenomenology, pedagogy, and Derek Jarman's *Blue*. *Cinema*, 3, 19-38.
- Titon, J. (2015). Thoreau's ear. *Sound Studies: An Interdisciplinary Journal*, 1 (1), 144-154.
- Van der Wal, E. (2019). The fire in the voice: Umlilo and the performance of queer South African life. *Whatever: A Transdisciplinary Journal of Queer Theories and Studies*, 2, 97-116.
- 鷺田清一 (2015). 『「聴く」こと of 力: 臨床哲学試論』 筑摩書房. (TBSブリタニカ版1999)